



秋田県立秋田高等学校第28代校長 鈴木健次郎氏離任演説

汝、何の為に其処に在りや





鈴木健次郎校長離任演説全文

昭和42年（1967年）4月10日

秋田高校大体育館にて

4年間、諸君とともに、秋高の新しい発展のために努めてまいりました。わたくしは、よくその間に、中心校ということを申したのであります。中心校とは、なにも秋田県を中心に所在するからというのではないのであります。

また、諸君のエリート意識を強調したわけでもないのであります。本校の長い歴史と伝統が、本校に期待する社会的要請を述べたのであります。

今、高等学校の教育が当面しておる学力の向上、あるいはまた、スポーツの振興、あるいはまた、日常生活の正しさ、そういうものに対して、秋高がその中心となつて、その先達となつて、あらゆる問題を解決するために秋高の役割を強調してまいったのであります。

秋高は、古い伝統を持っているのであります。しかし、伝統が古いとか、歴史が長いとか、あるいは設備がいいとか、そういうことは、必ずしもいい学校の条件ではありません。生徒の、一人ひとりの生徒が、学業の生活に対して、スポーツの生活に対して、また日常生活について、どのような積極的姿勢を持っているかどうかによって、いい学校であるかどうかということが決定するのであります。

そういう意味において、わたくしは、常に諸君に、自覚ある、そしてまた、厳しい毎日毎日の鍛錬の生活を要請してまいりました。そういう意味において、わたくしは、いい学校であるために、一人ひとりの生徒諸君の心構えを強調してまいったのであります。

スポーツと学業の両立ということは、きわめて困難なことであります。わたくしも、それを十分承知いたしておりますけれども、なお、スポーツと学業の両立を強調したのであります。生徒の一人ひとりが、この目標に向かって、何ものにもくじけない信念を持って、何ものにもくじけない意志を持って、何ものかを創造する力を生徒諸君に期待したのであります。わたくしは、これからの諸君に望みたいことは、今の民主主義というものは、ともすれば、外部の権力に対する抵抗として考えられますけれども、本当の民主主義とは、自らの内心にある邪念・欲望に打ち勝つことであります。

その自らの内心にある邪念・欲望に打ち勝つてはじめて本当の意味の民主主義というものが確立されるのであります。そういう意味において、これからも、生徒諸君は一人ひとりで、自らの邪念・欲望に勝つて、みんなと協力のできる学園をつくつていただきたいと思うのであります。

わたくしは、秋高を愛する。それが故に、また再びここに、諸君に入学式に際して述べた同じ言葉を繰り返して、お別れの言葉にいたしたい。

「汝、何の為に其処に在りや」

この言葉にはつきり断言のできる、生徒一人ひとりの毎日の生活であつてほしいのであります。わたくしは、秋高を愛する。それ故に、わたくしは、諸君の一人ひとりの努力によつて、秋高が今後ますます発展することを心から祈願するものであります。

(テープ起こし)

鈴木健次郎

秋高生諸君に望む

鈴木 健次郎

わたくしは、本校に着任してから、もう一年余になった。早いものである。そしていま二回目の卒業生を送ろうとしている。

わたくしは新任式のさい、全校の生徒諸君に対して、「汝なんのためにそこにありや」というハーバード大学のジョンソン教授が、毎年の入学式と卒業式にいつも訴えていた言葉を引用して、生徒諸君の自覚ある生活を求めたのであった。つまり生徒諸君はどのような環境に立たされても、秋高生の誇りをもつて、自主的な生活をして欲しいと望んだのであった。このことは生徒諸君にもよく理解されて、徐々ではあるが、秋高の新しい秩序が生まれつゝあるようである。

よく、世間では秋高を県内の中心校という。これは、本校のもっているながい歴史とこの間において培われた輝かしい伝統が、本校に求める社会的使命をうたったものである。このことは、別に本校が本県の中心的地域に所在するということではなく、本校が、県内高校界がいま当面している社会的要請をその先駆として解決することを求められていることと考える。

すなわち、学力の問題にしても、また青年非行化などの問題にしても、本校が率先解決して社会の負託に応える任務を与えられているものと考ええる。

勿論、学校がいゝか、悪いかということとは別に歴史が古いか、伝統がいゝかによつてきまるものではない。一人一人の生徒の日常生活がいゝか悪いかということによつてきまるのである。本校に学ぶものにとつてたゞ学校の背景となつてゐる永い歴史とか、いゝ伝統とかの精神的風土の中に、お互が努力できる条件があるだけである。だから、いま如何に立派な校舎が新しく建つても、この条件はみたされずとは限らない。その点、本校に学ぶ生徒は、その置かれたいゝ環境の中で育つので、その点まことに恵まれたといわねばならない。

この間、産経紙上に本校の辿つた具体的足跡が紹介されていた。それは学業に

おいても、またスポーツにおいても、一貫したハード・トレーニングの実践と輝かしい成果であった。

われわれはこの遺産を受けついで、更にこれを発展していくのが、本校に学ぶ一人一人の生徒の態度でなければならない。そして社会もこのことを求めているのである。

この元旦に、わたくしは差出人の名前のかいてない一通の手紙をもらった。その中には燃ゆるような母校愛がしたためてあり、その生徒が年末アルバイトをして得た報酬が入っており、これを学校の発展のために役立てゝ欲しいとかいてあったのである。わたくしはあふるゝ感動で、このたよりをよんで、この新しい年はなんとしても、この一人の生徒の期待に応えねばならないと誓ったことであつた。

秋高に学ぶものは、特にきびしい日常を持たねばならぬ。学習やスポーツなどで、県内でよりすぐれた成績をあげても若しそれが全国的立場でその評価に耐えられないものであつては意味のないことである。一人一人がその全国的視野に立つて、すぐれた生活を営むことを社会も求めているのである。

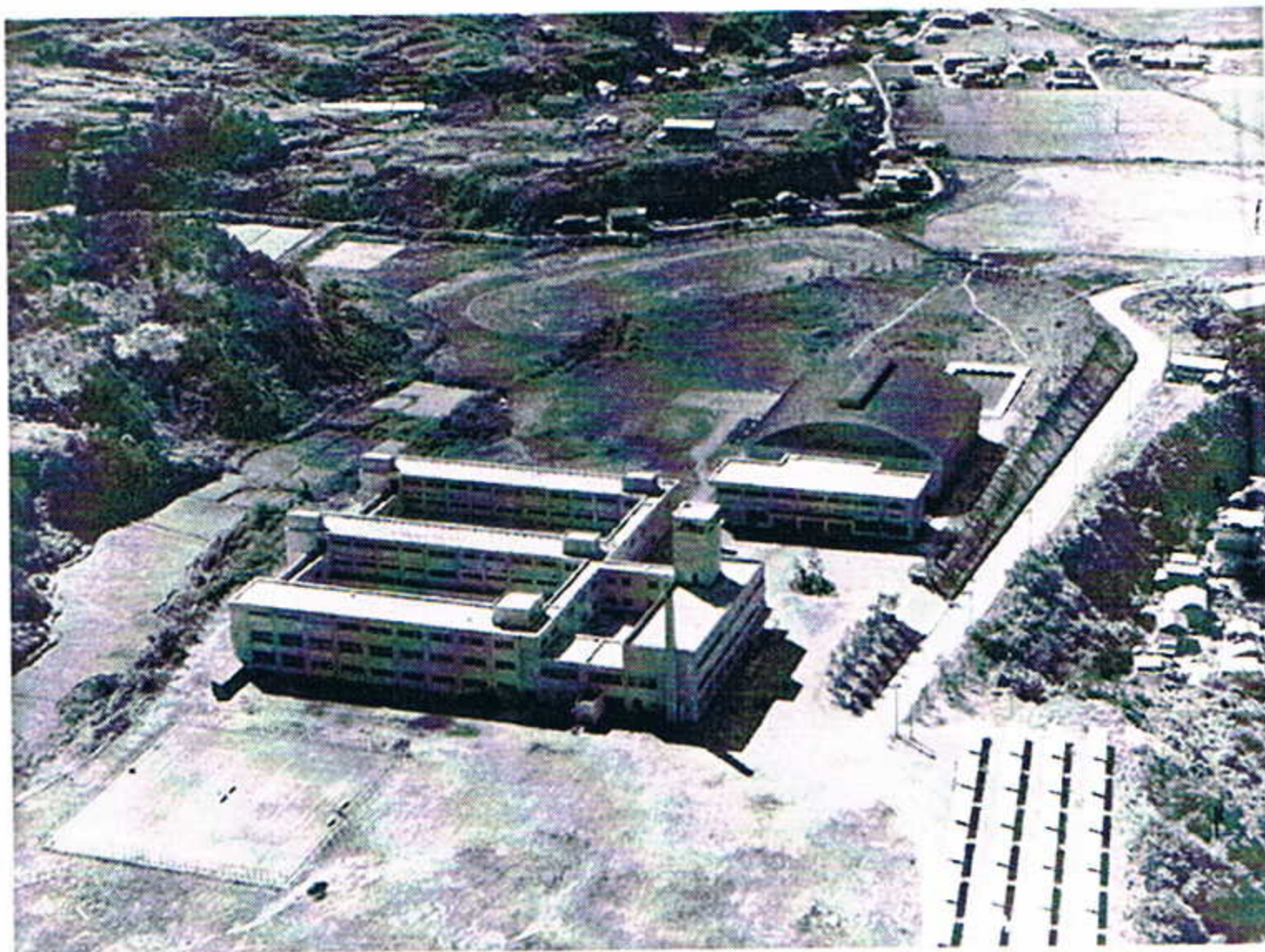
その意味で秋高生諸君は、高い使命感をもつて充実した日常をおくつて貰いたい。鍛錬のないところには成長もない。きびしい毎日をおくつて、三年間の成果がもたらされる。

諸君は、秋高に入学を決意したときの初一念と、きびしい毎日を通じて入学を許されたときのよろこびを忘るゝことなく、充実した日常をおくつて欲しい。このことは、進学するものにとつても、また就職するものにとつても輝かしい未来を約束してくれるものと信ずる。

毎日毎日の一瞬を完成し得ないものは、また、自分のながい人生航路を完成し得ないものであろう。

「羽城」第16号（昭和40年）巻頭言より





手形中台の旧校舎全景（昭38）



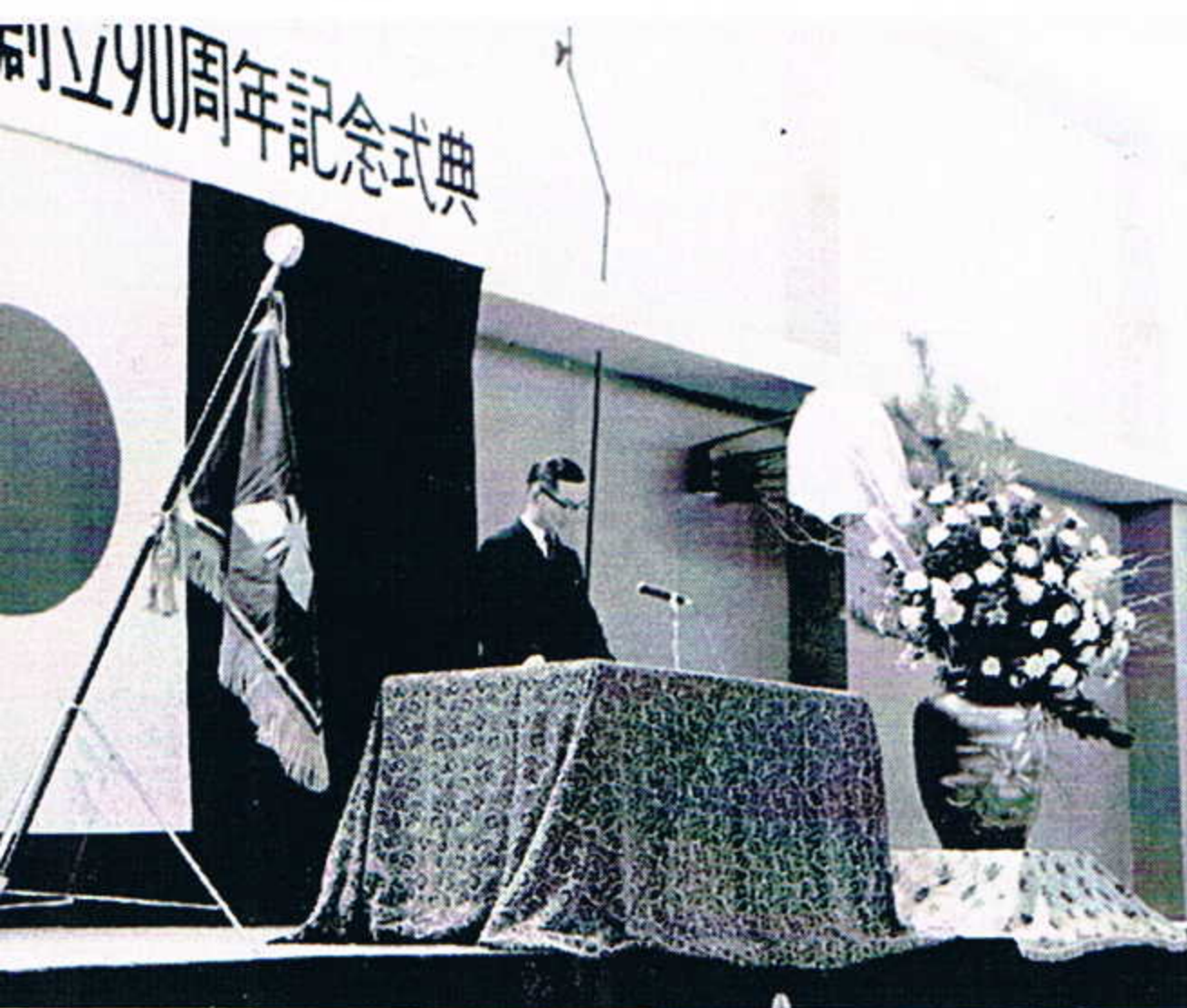
当時、県下の高校初の鉄筋校舎



生徒昇降口



生徒の憩いの場だった中庭



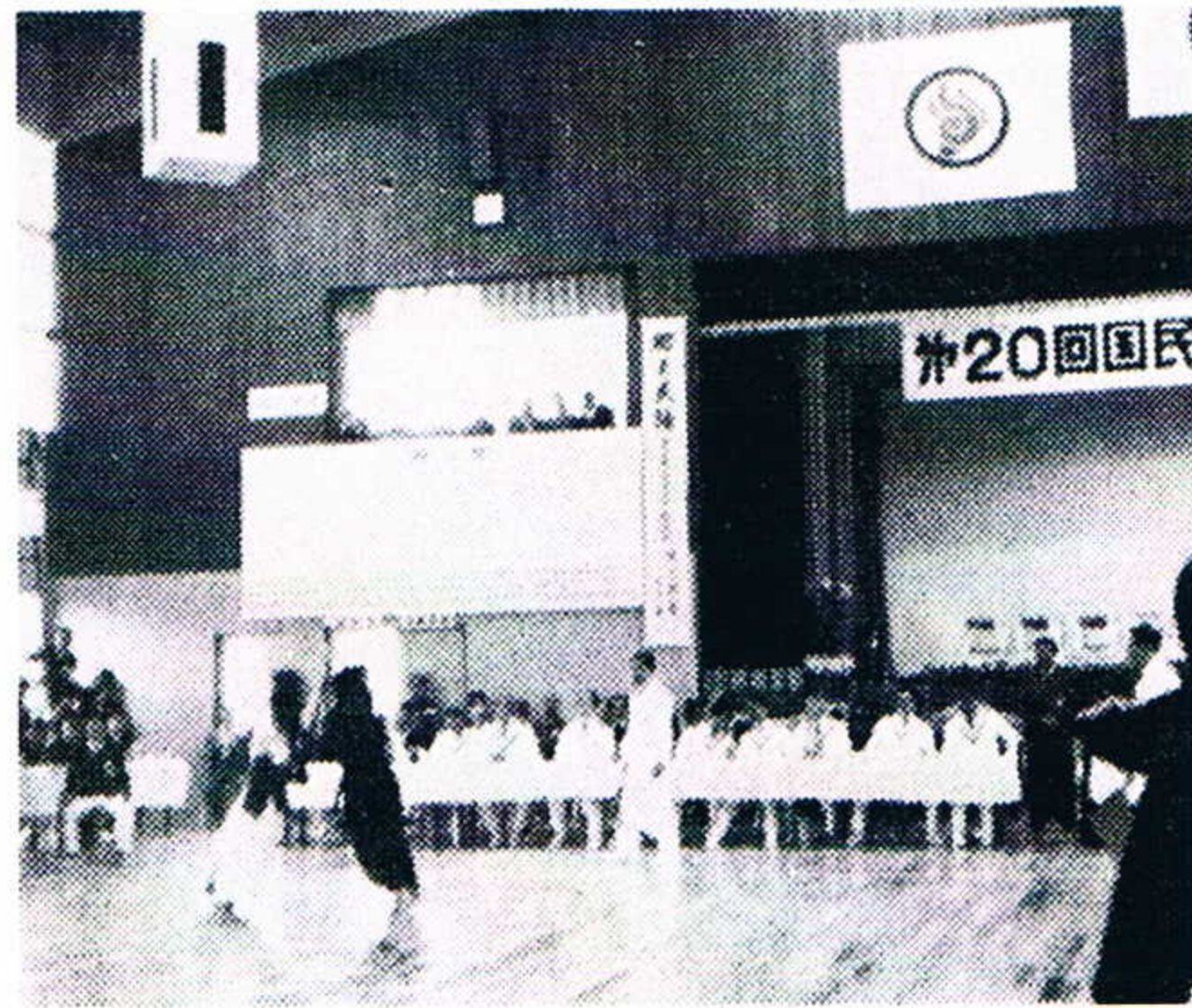
創立90周年記念式典 校長挨拶（昭38）



秋高伝統の棒倒し（昭38・運動会）



頂上をめざす（昭40・山岳部）



岐阜国体で健闘（昭40・剣道部）



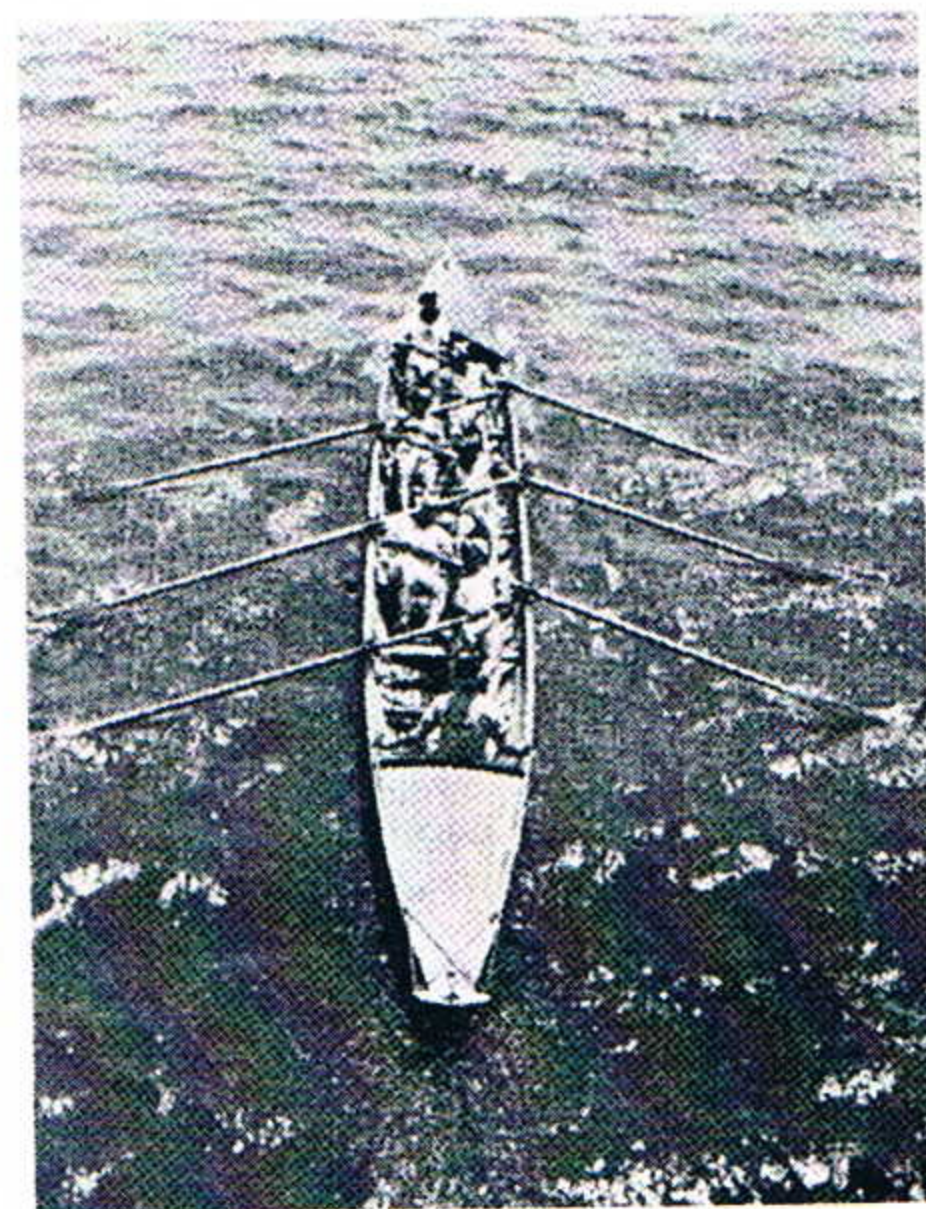
ラグビー部、花園でベスト4の快挙（昭41）



青森インターハイ（昭40・バスケット部）



秋高ラグビー、勝利への突進！（昭41）



沫は白く！（昭40・ボート部）

教育人物誌

鈴木健次郎氏

当時の秋高教頭 中山 健氏（昭8卒）

昭和三十八年四月、母校秋田高校の校長に迎えられた鈴木先生は、並々ならぬ覚悟をもって秋田駅に降り立った。

（中略）

このころは新校長に対する校内外の期待感が非常に強い時期であつた。すなわち、高校教育界では、新教育課程実施の第一年目であり、新しい体制で教育内容の充実を図つていこうという空気があつたし、秋高にとつては創立九十周年の年で学校の士気を高揚しなければならないという、そういう時期にさしかかつていた。こうした事情のもとに、できたら同窓生からという要望があつて、先生は秋田中学同級生の小畑知事の懇請を受け、東京から着任したのであつた。

（中略）

汝、何のためにそこにありや

先生の新任式での話はまことに感動的なものであつた。アメリカのハーバード大学のジョンソン教授が毎年の入学式と卒業式に訴えていたという言葉を用いて「汝、何のためにそこにありや——いつ、どんなとき、どこで、だれに、この問いを発せられても即座に断言できる自覚ある生活を送ってもらいたい」と呼びかけたのである。秋高生は話の内容に応じた反応を示す傾向があつて、必ずしも行儀のよい聞き手ではないが、さすがにこの時は水を打ったような静けさで聞いていた。

日々を漫然と過ごしがちな生徒にとつて、目標を持った自覚ある毎日を送れと訴えたこの言葉は、魂をゆさぶるものがあつたのである。秋高百年史には、この言葉について「手形中台の学舎に、心の支えとなる合い言葉がやっと生まれた」と書かれているが、まさにそのとおりであつた。後々、生徒たちは、この言葉を「秋高語」としてホームルームの討議や校内演説会でもよく口にした。長男康一氏によると、この言葉

は先生のバックボーンになっているもので、人生の大事な節々で必ず先生の口から出たものだという。

(中略)

秋田の生んだクラーク

先生は終生青年のような若々しきで向上の意欲を捨てず、任運騰々、人生を明るく生きがいをもって進んだ。自分に対しては非常にきびしく他には実に穏やかな人であった。

着任以来四年の月日はまたたく間に過ぎて、いよいよ定年退職の時を迎えた。期せずして校内外から退職を惜しむ声が起こり、同窓会からは留任運動が持ち上がった。しかし先生は、人は引き際が大切だと言って退任の覚悟は固かった。いよいよ退任の日が来た。退任のあいさつは実に感動的なもので今でも語りぐさとなっている。ここでも「汝、何のためにそこにありや」を引用し、生徒一人ひとりに自主自立の自覚ある生活を要望し、秋高のいつその発展を祈って別れの言葉としたのであった。式が終わって退場するときは、期せずして万雷の拍手が湧き起こった。先生がいよいよ学校を去るときは、校庭に生徒が走り出て、手を振りながら坂を下っていく先生をいつまでも見送っていた。

先生は社会教育から学校教育に転じたアウトサイダーであったが、実は教育の原点を体得していた偉大なインサイダーであった。教育は一つというが、確かに社会教育も学校教育もない。あるものは青少年への献身的な愛情であって、単に知識を授けることが教育でないことをあらためて先生に教えられたような気がする。

先生はまさに秋田の生んだクラークという感じを禁じ得ない。クラークが札幌農学校にいた期間はわずか八カ月なのに偉大な教育効果を上げた。先生も秋高の在任はわずか四年にすぎなかったが、名校長として秋高の伝統に新しいともしびを点じたのであった。

鈴木 健次郎

【明治40年2月14日

～昭和45年8月24日】

青少年指導者、社会教育者



【経歴】

明治40年 2月14日

大正13年 3月

昭和 2年 3月

昭和 5年 3月

昭和 5年 5月 ～ 6年 9月

昭和 7年12月 ～ 20年 4月

昭和20年 9月 ～ 26年 6月

昭和26年 6月 ～ 33年 8月

昭和33年 9月 ～ 38年 3月

昭和38年 4月 ～ 42年 3月

昭和42年 4月 ～ 45年 8月

昭和44年12月 ～ 45年 8月

昭和45年 8月24日

南秋田郡土崎港町本山町生まれ

秋田県立秋田中学校卒業

山形高等学校卒業

東京帝国大学法学部卒業

朝鮮元山神学院教授

日本青年会館に勤務、青年教育活動に従事

大日本連合青年団初代商工課長などを歴任

文部省社会教育局に勤務。文部事務官として

公民館制度創設に奔走、「公民館運動の父」

と呼ばれた

福岡県教育委員会社会教育課長

日本教育テレビ（NET）に勤務

秋田県立秋田高等学校長

秋田県新生活協議会副会長

財団法人秋田県青年会館理事長

秋田市で病没（享年63歳）